

追肥がいらない、ナガイモの全量基肥栽培

ナガイモ栽培において、肥料が徐々に溶け出す特性を持つ肥効調節型肥料を用いることで、追肥作業を省略することができ、作業時間を最大で10a当たり2.8時間削減できる上、従来の栽培方法と同等レベルの収量が確保できます。

研究成果の概要

1 背景・目的

ナガイモ栽培では、近年、高齢化等により生産者が減少しており、労働力不足に対応した省力技術が求められています。

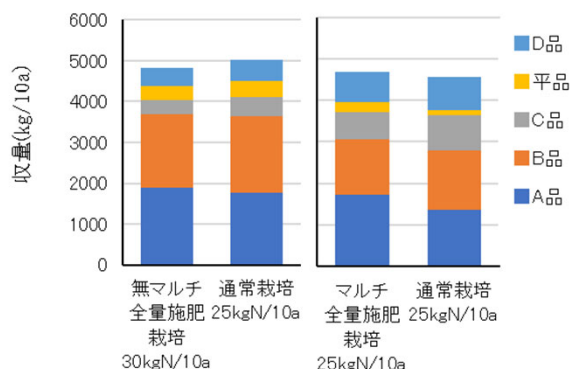
そこで、通常は生育途中に3回程度行う追肥作業をせずに、植付前にすべての肥料を施用する全量基肥栽培について、施肥方法と省力程度、収量性を研究しました。



施肥機(左)と覆土畝成形機(右)

2 内容

- ・施肥方法は、窒素肥料にはLPコートS60（肥効調節型肥料）を用い、肥料全量を種芋の植付時に畝の肩にあたる部分に施し、種芋にかぶせる土と混ぜ合わせます。
- ・施肥量は、マルチシートを使わない無マルチ栽培では窒素肥料を通常栽培より2割程度増やし、マルチ栽培では通常と同量程度とすることで、通常栽培と同程度の収量が得られることがわかりました。
- ・作業時間は、通常栽培に比べて、無マルチ栽培では追肥作業がなくなるため2.8h/10a減少し、マルチ栽培ではマルチを張る作業と片付ける作業が増えるものの、0.6h/10a減少しており、いずれの栽培方法も省力化できることがわかりました。



収量の比較

試験年は左:R3～5年、右:R元～3年
通常栽培は基肥に加え、追肥を3回行った。

3 活用等

- ・今後、青森県のナガイモ生産現場ではますます高齢化や労働力不足が危惧されていることから、この技術の導入による軽労化が期待されます。

関連情報

- ・詳細については、令和6年度普及に移す研究成果・参考となる研究成果「ながいもにおける全量基肥栽培の省力効果及び施肥方法」を参照してください。

https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/nosui/hukyuugijutu_yasaimokuji.html

